
ウィザードライセンス

七篠雅大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザードライセンス

【Nコード】

N6931Y

【作者名】

七篠雅大

【あらすじ】

魔法使いって言っても、そんなに便利なもんじゃないですよー。そう諭してみたものの、あの鬼社長は俺を雇用しやがった。トラブル解決屋「NaN」の社員Aと社長が繰り広げる、魔法2割・雑談8割のアクションコメディ。

第一話 俺からの依頼

「意外だな。君がまだガスや水道を使っていたなんて。公共料金もバカにならないだろう？」

時刻は午後十時。葉瀬川黒、性別女、年齢不詳、職業トラブル解決「NaN」社長を部屋に案内すると、いきなりそんなことを言われた。

「いやいや、当然だと思いますよこれぐらい」

「そうか？ でも君なら指から火を出せばいいし掌の器に水を出せばそれで済むと思うんだが」

「いちいちそんなことやってたら、今度はエンゲル係数が大変なことになるですよ……」

いくら魔法を使えるからと言っても、何もないところから何かを生み出すことはできない。対価として自分の体内のエネルギーがなくなり持っていかれるのだ。当然、腹が減るし、それ以前に乱発していたら体がいくつあっても足りない。

「それもそうだな。この間一回やってた雷落とすヤツとかは、もうなんか死ぬ一步手前って感じだったし」

「それを見て腹抱えて笑ってたのはどこの誰でしようかね」

「あ、それアタシだわ」

悪びれる風もなく言うのでたちが悪い。

「『新魔法開発した』とか言うから見てやろうとしたら、張り切りすぎてでっけえ雷落として体力九〇パー以上使い果たすとか……笑い話にしかならんだろう。あ、思い出したらまた笑えてきた」

くっくくくと笑いを漏らす黒。前から思っていたが、性格悪いなこの上司。

「はあ……。なんでもいいですけど、そろそろ本題に入りましょうよ」

「ああ、そうだったな。確か、君から依頼があると言っていたな。」

分かっているとは思いますが、社員でも金は払ってもらどうぞ」

「まあ、そういうと思ってましたけど。六万は痛いですよ……」

渋々財布から諭吉を六人取り出して、黒に手渡した。

「毎度あり。あ、前から思ってたんだが、毎度ありって初めての客にも使っているものなのか？ 毎度じゃないのに」

「さあ？ 次からもよろしくって意味で使えば問題ないんじゃないですか？」

「おお、なるほど」

本気で感心したように黒が言った。性格悪い上に、どこかズレている。まあ、ズレていなければ「トラブル解決屋」などという胡散臭い商売はしないだろうが。

「で、依頼内容は？」

「えーとですね……」

話は、一週間前にさかのぼる。

俺、吉川芳紀、性別男、二〇歳、職業トラブル解決屋「NaN」社員、魔法使いがこの部屋に越してきた時の話である。

一通り荷物や家具などを新居——二階建てアパートの一室に運び込んだ俺は、いろいろと困ったことになった。

とりあえず一段落したので、覚え立ての煙草でもふかそうかとベランダに出た。ライターどこやったかとポケットをまさぐるが、出てこないの、仕方なく指に火を灯した。一瞬だけで良いし、火の大きさもそれほどではない。体に支障をきたすほどの魔法でなければ、まあたまにこうして使うことはある。

しかし問題はそこにあるのではない。

隣人に、その場面を目撃されてしまった。

「どうやって火を出していたのか」などとしつこく問いつめられてしまい、もうヤケクソだどうにでもなれといった調子で自分が指から火を出すどころかいらないことができる（要するに魔法が使える）ことを教えてしまった。初めは何かのトリックではないかと

疑っていたようだったが、本当に種も仕掛けもないということが分
かると、隣人は「一人にさせてくれ」といって部屋の中に引きこも
ってしまった。

おそらく、今までに見たことのない怪奇現象を目にして混乱して
しまったのだろう。

それだけなら、まだ良かったのだが……。

「翌日からですよ。早くこのアパートから出ていけって感じで、嫌
がらせみたいなのが始まって。ポストに新聞の見出しの文字を切り
抜いて作った『出ていけ』みたいな手紙が入ったり、部屋の前に
ゴミが捨ててあったり……」

「ちよっと待ちな。どうしてお前が出ていかなければならない？」

「こつちが聞きたいですよ……まあ、隣の部屋の人間がバケモノだ
ったらそりゃあ嫌でしょうに」

自虐的な笑みを浮かべてみた。別に本気で言ったわけではないの
だが、

「ばかもの」

と、黒に頭を殴られた。

「痛っ、何するんですか社長」

「自分のことをそんな風に言うな。お前はバケモノなんかじゃない、
むしろばかものだ。……お前は、ちゃんとした一人の人間だろう」

ふん、と鼻息荒く黒が言った。

「社長」

「何だ」

「優しいんすね」

また殴られた。

「じゃあ、とりあえずお前がここでちゃんとのんびり暮らせるよう
に嫌がらせを止めればいいんだな？」

「まあ、そういうことになりますね」

「ホント、魔法が使えるつつうのも困りものだな」

「この時代には合わないんですよ。あーあ、時空間魔法でも使って昔に飛べりゃあな……」

「ンなことしたら、お前死ぬぞ？」

「分かってますよ」

時間をねじ曲げるといのは、おそらく魔法の中でもかなり次元の高いものだろう。そんなものを使えば、俺の体の中のエネルギーはまるまる持っていかれ、走馬燈を見る暇もなく一瞬で果ててしまうであろうことは、想像に難くない。

「うむ……どうやったら嫌がらせが止まるか、検討してみよう」

「はい」

話し合いが始まった。このような仕事上の話をする場合、黒は真剣な表情になる。

「じゃあ、こんなのはどうか？」

「何でしょう？」

「大規模魔法を見せてつけて『嫌がらせすんなやオラ』と脅す」

「たぶん逆効果、でしょうね」

相手はこちらがそのような行動に出ることを危惧して、早く出ていけと言っているのだ。火に油を注ぐようなことにしかないだろう。

「それに、そんな魔法を使ったら俺が疲れますし、何よりほかの住人にまで俺がバケモ……魔法使いだってばれますよ。そんなことになったら、事態が悪化するばかりです」

「それもそうか」

難しいものだな、と黒が唸った。

「……普通に暮らし続ける、っていうのも悪くない手かとは思いますが。俺に危険性が無いってことを認めてもらえばいいわけです」

「いや、そのイメージを覆すのにどれだけの時間がかかるかを考えると、どうにもそれじゃキツそうだな。毎日毎日家の前に残飯ベツトリじゃあお前の気がおかしくなるだろう」

「そうですね……。はあ、いい解決方法はなしか」

結局、話し合いは行き詰まった。

その後、まあとりあえず殴り込むかという結論に至り、芳紀と黒は隣の部屋を訪ねた。

ぴんぽーん

「すみませーん、誰かいますかー」

「そろそろ諦めましょうよ、社長。さすがに十分も家の前に居座られたら、向こうも困りますって。時間も遅いですし」

「困っているのはお前の方だろ？」

「いや、そうですけど……」

何度呼びかけても、隣人は結局出てこなかった。

未練がましく再度呼びかけを続ける黒を引っ張って、自分の部屋に戻ろうとしたその時。

「あら、そこに住んでいた人、一昨日引っ越しましたよ」

さらにもう一つ隣の部屋の住人が、親切にも教えてくれた。

「でも昨日も嫌がらせあったんすけどね。窓に残飯が張り付いてました」

「もうそれ警察に届けるか大家に言うかしたほうがいいだろう……」

黒が呆れたように言った。

「でも、隣の人は一昨日には引っ越してっただから、あの人の作業じゃあないってことですよね」

「まあ、そうなるな。というか、そもそもどうして隣の人間の犯行だと思ったんだ？」

「だって、あんなことがあった翌日ですし、わざわざ余所の人間が毎日律儀にイタズラしに来ると思えませんでしたし……」

「そいつはお前の魔法を怖がっていたんだろう？ だったら刺激するような真似をするはずがない」

「ああ、確かに」

言われてみれば、隣の人間が嫌がらせの犯人だと断ずるには証拠が不揃いである。どころか、黒の言うように自ら仕返しを受けそうな真似をするというのは考えにくい。早とちりをしてしまったのかもしれない、と少し反省した。

「だが、隣人が犯人じゃないとなると、じゃあ誰がそんなことをしたんだ？」

黒が当然の疑問を口にした。

「さあ、職業柄どこで恨みを買ってもおかしくありませんからねえ」

「それを社長の前で言うとはいい度胸だな」

「でも間違っていないでしょう？」

「……そうだな」

渋々と言った顔で黒が首肯した。

「とにかく色々探るためにも、まずは腹ごしらえだな。飯にしろ」

思考を放棄したかのように、黒はごろりと寝ころんだ。いや、ここ俺家なんすけど。

「そうですね……えーと、何かあったっけ」

「鍋がいいな」

「いいですね、鍋」

いいですけど、鍋なんてできる経済力はないです。給料低いし、ついさっき諭吉六人さらわれたし。できたとしても湯豆腐までだ。冷蔵庫を見ると、卵が二つ。あと、マヨネーズとドレッシングがある。いや、それだけしかない。続いて戸棚を覗いても、カップラーメンやらインスタントラーメンやらの文明の利器もとい利食は見当たらなかった。

「社長、残念ながら湯豆腐はできそうにありません」

「湯豆腐ってできても残念感があるけどな。あと私は湯豆腐を鍋だと認めん」

「なっ……！ 湯豆腐おいしいじゃないですか、湯豆腐に謝れ！」

「そんなに好きか湯豆腐……。まあいい、だったら出前取れ」

時計を見ると、すでに十二時を回っている。さすがに無理だ。

「おっ」

炊飯器を見ると、かろうじてご飯が残っていた。これで何とかで
きないだろうか。

「社長」

「なんだ？」

「卵かけご飯って、湯豆腐の次の次くらいに美味しいですよね」

本日の夕飯。

ご飯一膳、卵一個（一人分）。

ちなみに醤油はありませんでした。

第二話 起床、そして出勤

「……ん？」

どうやら、昨晚卵かけご飯を食べた後、すぐに寝てしまったようである。時間は一時を回っていたし、仕事終わりに依頼を聞いて貰っているという動き回ったので、俺も黒も疲れていたのだろう。

「あ、そうだ」

今になってやっと気づいたが、黒はどこに……。
ごそつ。

「うーん……」

布団も敷かずに寝てしまったので、床の上ではあるが。
隣に黒がいた。否、寝ていた。

「おいおい……」

顔から、体中から血の気が引いていくのを感じる。もしやこれは「一夜をともに過ごした」ということになってしまいうのだろうか。いやいや、やましいことなどないのだから問題なからう。しかし、見た目年齢で「自主規制」歳になる黒と寝たというのは、何とも気が重くなる。確かに黒はそれなりに美人ではあるが、見た目「自主規制」歳の女性、悪く言えばオバハンと寝る趣味はない。俺は……。

「俺は熟女趣味なんかじゃないんだああああ」

「うるするええ！」

翻訳すると、うるせえ、である。おそらく。寝起きでしたが回らなかったのだろうか。

黒のチョップが俺に襲いかかった。

「っ痛う……！」

「おい、朝っぱらからなに叫んでるんだ」

「社長も今し方『うるするえ』という奇声を上げたところでは……」
「お前のせいだ」

指摘されて思わず二の句をつけなくなる。

「って酒臭っ!？」

「当然だろ。飲んだんだから」

どうやら俺が寝落ちしてしまった後も、しっかり一人で酒を楽しんだらしい。

「ていうか多分俺の酒ですよ、それ」

「だから当然のことばかり聞くな。というか酒があるなら早く言え。卵かけご飯と一緒に飲んだ方が絶対うまかった」

俺の渾身の一品をおつまみ代わりにしないでください。

渾身といっても、それしかなかったただだが。

「まあ酒代は後で給料から引いとくから安心しろ」

「足してください」

なぜ自分の酒を飲まれた挙げ句給料までさっ引かれるのだ。

「はあ……。もういいです、酒の話は。依頼を解決してくれるんでしたらチャラにします」

「そうか」

まだ本調子ではないらしい黒が適当にうなずいた。頭を痛そうにしているので、二日酔いだろうか。黒はぐるぐると首を回して、欠伸をした。

「とりあえずお前の件は夜に処理していくとして、今日も出勤しないとな」

「やっぱりそうですよね」

俺も黒も、一応は社会人である。時間はきちんと守らねばならない。トラブル解決屋「NaN」の事務所が開くのは午前十時だ。普段からそれほど客が多いわけではないので、この時間でも特に問題が生じない。

客が少ない故に始業時間は遅いが、なにぶんグレーな商売なので、それ相応のグレーな客もしばしば訪れる。そのため終業は午後十二時である。昨日早く仕事を終えた（といっても、社長は俺の依頼を

聞くという業務をしていたが）のはあくまで特例で、普段はかなり遅くまで仕事をしているのだ。

仕事といっても、本当に客が少ないので事務所の机についているだけののだが。

「時計時計つと……」

「壁掛け時計とか置き時計とかないのか？」

「ああ、はい。一人暮らしする分には腕時計があれば十分ですし。目覚ましはケータイを使ってますしね」

もつとも、一人暮らしではそもそも時間自体さほど気にする必要もないので、家の中では腕時計も外しているが。

ごそごそと部屋の中を這いずり回って、やっとのことで腕時計を発掘し、時計をのぞき込む。

すでに、十時半を回っていた。

「社長」

「なんだ？」

「走りましょう」

俺の家から事務所までは、徒歩で五分、全力ダッシュなら二分の距離にある。そのため自転車や自動車などの通勤手段は用いない。それでも俺も社会人の端くれ、中古車ではあるが車も持っているし免許もある。

しかし、本来ならば、走った方が車で行くよりも近い距離だ。だから走ろうと黒に提案したのだが――

「頭痛い。無理、走れない。車で送ってくれ」

――という鶴の一声で、結局車で事務所に向かうことになった、のだが。

「この距離で渋滞かよ……」

「全くだ。何をしているんだ。ぐずぐずしている暇がないことぐらいわかってるだろう」

「アンタよりはわかってるよ！」

そう言ってみても、黒はいつものように、悪びれる風もなければ全く動じてもない。いや、「悪びれる」とか「申し訳なく思う」とかいう単語は、この人の辞書には載っていないのかもしれない。なら仕方がない、と諦められる問題でもないが。

「何をしているんでしょね、ホント……」

そして、誰のせいでこんなことをしているんでしょね。

カーステレオに付いた液晶には、「10…52」という時刻が表示されている。これほど大幅の遅刻は、基本真面目な俺にとっては初めてのことだ。

「はあ、こりゃ幸崎さんに怒られるだろうなあ……」

「あいつは厳しいからな」

「せめて社長もあれくらい厳しくなってくれたらいいんですけどね」
「安心しろ、アタシは遅刻くらいじゃ怒らない広い懷を持っている」

「ありがとうございます。でもせめて自分にだけは厳しくなってください」

「嫌だね」

にやにやと笑って黒が言う。弄ばれているようで良い気がしなかった。

結局、事務所に到着できたのは午前十一時を回った頃だった。

第三話 危ない仕事

「ふう……おはようございます……」

「遅いよ芳樹君。遅刻一時間以上なんて、新人のする事じゃ……つて黒さん!？」

「よっ、幸崎」

事務所に到着した俺と黒を出迎えたのは、幸崎靈華、性別女、二六歳、トラブル解決屋「NaN」の社員だった。非常に厳しいが（黒曰く「指導癖」）、柔和な笑みを作ることのできる彼女は、基本的に受付の仕事に回っている。

今日もその指導癖で俺に注意をしようとしたようだが、黒を見てよほど驚いたのか、しばらく口をあわあわとさせていた。

「どうした幸崎？　なんか変なことでもあったのか？」

「……黒さん、昨日確か早退して吉川君のところに……」

「ああ、行ったな」

「ですよね……。おまけに黒さん、なんかお酒のにおいするし……」

それで、一緒に出勤って、まさか昨日……」

わなわなと震える靈華。なんだか、嫌な予感がした。

「ああ。寝たぞ、一緒に」

「何でそういう言い方しかできないんですか社長!」

「やっぱり、そうなのね!　そうだったのね!」

そうだったのねー、と叫びながら謎のハイテンションで乱舞する靈華を後目に、黒は「ん?」という顔をしている。本当に意味が分かっているのかもしれない。

そんなんだから結婚できないん……」

「痛い!」

黒から前振りなしにチョップが襲いかかった。

「なんで殴るんですか!？」

「いや、なんか失礼なこと考えてたっぽいから」

「まさか……俺の本音を見破っただと!？」

「そこで本音っていったらいろいろアウトだけどな」

黒が苦笑いした。あっち系のことは鈍くても、こういう自分に対するイメーজなどのことには鋭いらしい。野生の本能のようなものなのだろうか。

その後、未だに乱舞を続けている霊華をなだめるのにしばらく時間がかかった。

「そう、依頼の話をしてたのね。……でも、それが遅刻して良い理由にはならないわよ？」

「すいません……」

「まあ今回のことは大目に見てあげるわ。なんか大変そうだし」

大変そう、というのは、俺が黒に出した依頼の内容のことだろう。

「ただ、いくら時間がないと言っても、着替えくらいはしてきてほしかったかな……そのシャツも何も、昨日のままじゃない。お風呂も入ってないんでしょ、どうせ」

「うっ……」

たしかに、本当に必死で急いできたので今まで気づかなかった——という気が回らなかったが、俺も黒も服装は昨日のままだ。まあ、黒に関しては着替える服自体がないので当然だが。

風呂に入っていないので、体臭もかなりきついのもかもしれない。それでも、黒の酒臭さと比べればましである。……と、信じたい。

「とりあえず、奥のシャワールーム使って良いから、さっさと行ってきたさい。どうせ客はほとんど来ないんだし」

「ここシャワールームとかあるんですか!？」

「知らなかったの? 一仕事した後に入るお風呂は気持ちいいよー?」

お風呂と言ってもシャワーだけなんだけどね、と霊華が付け加える。まさかこの謎事務所にそんな施設があったとは。

「替えのシャツもあるから用意しとくね。ほら、黒さんも早くシャ

ワー浴びてきて」

「んー……頭痛い……」

「まったくもう……」

靈華が俺に説教をしている最中、黒は、二日酔いの頭痛がまた襲ってきたのだろうか、ノックダウンしていた。事務所入り口にある来客用のソファでぐったりと寝ている。

そんな時である。事務所の入り口から、二人組が入ってきた。

「おーっす……」

やってきたのは待ち望んだ依頼人ではなく、向日槿、性別男、二五歳、トラブル解決屋「NaN」社員と。

「疲れた……」

瀧澤咲、性別女、二二歳、同じく「NaN」社員だった。

「あら、槿君、咲ちゃん。お帰り」

靈華が槿と咲を出迎える。当然のことながら、俺と黒が出勤したときよりも対応が柔らかである。どうやら槿と咲は今まで仕事をしていたようだ。

「ふええ……今回こそ死ぬかと思った……」

「そんなに大変だったの？ 暴力団のお手伝い」

「なっ!？」

思わず声を漏らしてしまった。

確かにここはトラブル解決屋。胡散臭い依頼や多少危険を伴う依頼も舞い込んでくることはある。だがそれでも一般人の常識から逸脱しないレベルだった。少なくとも、ここに入ってから俺が請け負った依頼は。

しかし。

「ああ、わりと大変だったぜ。なんせ機関銃持ち出してきやがって、相手の組。拳銃くらいならまだ楽だけどよ、盾にしていた車が吹っ飛んだ時はさすがにビビったぜ」

「ビビっただけで済む槿君はいいよね……。はあ、私なんか本当に生きた心地がしなかったよ」

「あら。まあ、お疲れさま」

事務所の面々は誰も皆、平然としていた。ちなみにそのとき俺は啞然としていた。

「あ、シャワーさっさと使ってきなさいな、芳樹君」

「あ、はい……」

あまりの「世界」の違いに面食らった俺は、半分無意識でふらふらとシャワールームに向かった。

シャワーを浴びながら、いろいろなことを考えた。

自分は本当にこのままこの事務所で働いていいのか。ここで働くことによって死ぬことはないのか。また、誰かを死なせるようなことはないのか。

先ほど槇と咲がしていた話からすると、どうやら二人は暴力団の手伝いのようなものをしていたらしい。銃撃戦があったようなことを言っていた。にわかには信じがたいことだが、もし事実なのだとしたら、相当に危険なことに足をつっこんでいることになる。

これは、誰がどう見ても、ヤバい。

「ん……ああ、お前か」

シャワールームから出ると、黒がソファアに座っていた。彼女も女性用のシャワーを使っていたようである。濡れた髪をタオルで拭いているところだった。

「社長、聞きたいことあるんですけど」

「どうした？ ビビったか？」

見抜かれていた。

「……はい、正直」

「プツ」

「笑わないでくださいよ！ ああ、もう。……あんな仕事、よくあるんですか？」

「あそこまでのさはすがによくあるとは言えない。まあ、多くて月イチだ」

「十分多いですよ……」

「安心しろ、今のところお前にそういう仕事を回す気はない。だってお前は」

新人だからな。

黒は、そう言った。

「まあ、もうそろそろお前がここにきて二ヶ月……ってどこか。新入社員も、この頃になると、この仕事がどれだけヤバイもんかってことに気づく。それで大抵の奴は三ヶ月でやめていく」

「……」

「まあ、あいつらは三ヶ月過ぎてもずっとここにいる奴らだからな。根性ある」

「社長」

俺は覚悟を決めて、こう切り出した。

「教えてください。ここが、どんな会社なのか」

最初はな、アタシ、一人で始めたんだ。

トラブル解決屋なんて胡散臭いこと始めようと思ったのは、金が欲しかったから。

そもその前提として、アタシにはそういう「裏」とのつながりみたいなもんがあった。実家がヤクザでな……テキ屋系の。ああ、テキ屋の意味が分からないんだったら、辞書で調べてくれ。

話がそれだが、まあそんな感じでアタシは汚いことやってる金持ちの知り合いとかいっぱいいんだ。そいつらは大抵その「汚いこと」でいろいろ困ってる。そこに目を付けた私は、そいつらから何とかして金を搾り取ってやろうとして、こんな会社を作ったのさ。

少しずつ得意さんの依頼主とかもできはじめて、経営は軌道に乗った。当然危ない仕事や犯罪まがいのことも沢山やった。そうしなければ、生きていけないからな。

お前も知っていると思うが……というかその側面しか知らなかっただろうが、当然悪人ばかりから依頼を受けているわけじゃない。

最初の頃はそういう「普通じゃない」依頼の方が多かったが、今となってはなんてことはない、善良な一般市民からの依頼が九割だ。そしてそのほとんどは、どれだけ高くても一回三万円とか、常識の範囲内の額で受けている。

……ああ、昨日のお前からの依頼は六万ぶんどったが、ありや特別だ。アタシはあそこまで外道じゃない、一般人にはな。

ただ、当然一つにつき三万とかの依頼で社員たちの給料も払えるわけがないしな。依頼の数自体が少なすぎて。

だからこそ、汚くて危ない依頼だ。

金が入る。

実はな……お前には黙っていたが、他の社員は完全歩合制だ。給料がまともにでてるのは、現時点では新人のお前だけだ。

ここにいる奴らは、まあ基本的にその報酬の多さに魅了された人間だと思っっている。ああ、悪人ってわけじゃないぞ？ 金は大事だ。あいつらも、大金が必要な事情を抱えてたりするんだよ。いろいろと、な。

まあまず間違いなく向日だけは私欲だろうが。

また話がそれて行ってるが、まあこの会社の実状はこんなもんだ。どうだ、驚いたか？

何、無理する必要はないさ。今のを聞いてここを出て行きたくなつたなら、そうするがいい。私も無理には止めようとも思わない。命の保証もできないしな。

もちろん、お前に危ない依頼を回さないようにもできるけどな。

私はそれでも良い。お前がここに残ってくれるだけで大歓迎だ。

お前が決める。

これはお前の問題だ。

ここで働くか、否か。

今すぐに決める必要はないが……いずれ結論は出してもらおう。わかったな？

第四話 葛藤

「ねえ、どうしたんですか芳樹君？　なんか頭抱え込んでますけど」
「どうやら、社長がまたなんかしたらしい」

ごすっ。

「言いがかりはよせ、向日。私はただこの会社の実態をありありと話しただけだ」

「ちょ、社長、物理はだめ物理は！　音が、音が生々しい！」

「まあ、そのうち元気になるわよ。……今は、そっとしておいてあげましょう」

「そうですね……」

順に咲、槇、（殴打音）、黒、槇、靈華、咲の言葉である。いや、殴打音は言葉ではないが。

俺は、同情されていた。

……正直こんなに良い人たちが、金目当てで危ないことに手を出しているとは思えないし思いたくない。だが、黒の話を聞く限りそうなのだろう。それぞれに金が必要な事情があるということを加味しても、やはり解せない。

二ヶ月前、俺は魔法の力を買われて黒にスカウトされた。今思えば、あの頃からおかしかった。

ただのトラブル解決屋——言ってしまうえば、便利屋でしかない「NaN」に、魔法の力が必要であるとは思えない。黒は初めから、俺に危険なことをさせるつもりで会社に招いたのだろうか。

ふと、昨日のやりとりを思い出す。

——ばかもの。

——自分のことをそんな風に言うな。

——お前はバケモノなんかじゃない、むしろばかものだ。

——…お前は、ちゃんとした一人の人間だろう。

黒は、俺のことを一人の人間としてみている。

今回の俺から黒への依頼も然りだが、この力を持っていて幸福だったことなど、かつて一度もない。いや、ライターをなくしたときには便利だが。

基本的に、俺の力を知った周りの人間は、俺から離れていく。興味本位で近寄ってきた奴も多少は居たが、俺の魔法の危険性について深くしるにつれ、離れていった。

だが、黒は俺の魔法を受け入れてくれた。

事務所の他の面々も、だ。

ここには、俺と同じとまでは行かないものの、似たような境遇の奴ら——理不尽な不幸を背負った奴らが多いからなのかもしれない。黒の言うように、大金が必要になるほどの、何かを。

……槇だけは本当に私欲のためにここで働いていて、本当に興味本位で俺の魔法を受け入れてくれているだけかもしれないが。あの先輩は馬鹿だから。

ここが、俺の居場所なのかもしれない。

だとしたら、俺はここに残るべきなのだろうか。

多少の危険は覚悟の上で、やっていくべきなのか。

結局、その日のうちに答えは出なかった。

「うっわ……ひどいなこりゃ」

「いつもこんなもんですよ。今日はマシな方です」

「いや、すまん……。正直昨日の段階だと、どうせたかが嫌がらせだろうとは思ってたけど、実際に見るとこれはひどいわ」

「思ってたんですね……」

まあ、普段から暴力団の抗争とかに関わっている会社の社長だったら、そういう感想を持つのも仕方ないかもしれない。今だからこ

そそう思えた。

だが、それとこれとは話が別である。

まあ確かに、これはひどい。どう見ても、誰が見ても。いや、俺はもうこのレベルなら見飽きたが。

現在の時刻は午前零時三十分。場所は吉川芳樹、つまり俺の自宅前。

玄関口のドアには、なにやら得体の知れない物体が張り付いている。言葉では言い表せないほどグロテスクで、かなりきつい異臭を放っている。

本当に……なんと言い表せばよいのか。「腐ったパイ生地と嘔吐物を混ぜ合わせて赤と紫と黒で着色したもの」それでも言えば想像は……できないだろう。たぶん、今読者が想像しているものの八倍はひどい。もし何かの間違いが起こってこの作品が出版、はたまたアニメ化されたなら、そこには確実にモザイクがかけられるだろう。ブルーレイやDVDでも除去されない……というかそんな修正はだれも望まないほど、とでも言えば少しは伝わるだろうか。

……弁解のために言っておきますが、「赤と紫と黒で着色した」の黒の部分に、社長に対する悪意は込められていませんよ！

「とりあえず、掃除……じゃない、除去、いや削除しないと……」

「どれだけこの物体に嫌悪感を持っているんですか」

「どれだけってそりゃあ、この世に存在して欲しくないくらいだな。臭いし。ああ、どけたいけど触れそうにないな……」

「任してくださいよ。馴れてますから」

俺は右の掌をその謎の物体に向け、ただひたすら「消えろ消えろ消えろ消えろ……」と念じた。すると、徐々に物体が——臭い煙を上げながら——霧散していく。

「げほっ、げほっ……臭っ！ ああ、この臭いはお得意の魔法でどうにかならんのか！」

「すいません、今消す方に集中してるんで話しかけないでください」じゅう、と音をあげて物体が完全に消失したのは、それから三十

秒ほどたった頃だった。

「ぐっ……はあ、ひどかった」

「ハア、ハア……。ま、毎度のことながら疲れます……あ、ちょっとミスった」

「何だ？」

肩で息をしながら先ほどまで物体が張り付いていたところを見ると、玄関の扉が少し欠けていた。というか、真ん中あたりが抉られていた。

「あーあ……社長のせいで集中が鈍った」

「アタシのせいなのか!？」

「ふう、疲れた。ここ賃貸なのに……大家さんに怒られそうだなあ。まあ、とりあえず入ってください。作戦会議です。ああ、今日はちゃんと帰ってくださいよ? 酒も禁止です」

「無視か!」

そんな黒の発言さえ無視して、俺はドアの鍵をあけて中に入った。

落ち着きを取り戻したところで、俺と黒は話を始めた。

「じゃあ、本題に入る……っと、その前に、意思確認だ。今日の話だが……決定をすぐに迫る訳ではないにしろ、その決定の時までどうするかくらいは早めに決めておく必要があるだろ？」

「それはつまり、とりあえず働くかどうか、ということですね？」

「そうだ。もしその決心に数ヶ月もかかるようだったら……そのときまでの生活費はどうするか。『とりあえず』うちで働き続けるか、他に職を探しておくか」

「他の仕事が見つかったら、もうそのままそっちに流れてしまいうですけどね」

俺はため息をついて考える。

確かに「NaN」は危ないし、あまりクリーンな会社とはいえない。しかし、魔法が使えてしまう俺は、人間関係に難があるというのも確かだ。

一度俺の力が職場で露見（まあ俺が使わなければ済むことなのだが、特に意識せず習慣で使ってしまうことがある）してしまえば、すぐに俺は職場で避けられるようになる。いわゆる「ぼっち」という奴だ。

それに比べると、多少危険であるにしても……いや、危険な仕事は回さないと言ってくれているのだから、ここにいた方が良いと思える。「居場所がある」というのは、俺の中ではかなり優先される事項なのだ。

今まで俺には、居場所がなかったから。

「……あんまり危ないことに手を出したくないので結論はもう少し先送りしておきますけど。『とりあえず』、ここで働きますよ」

「そうか！ いやあ、嬉しいな」

「意外です。社長がそこまで喜んでくれるとは」

「まあ、一応仲間だからな。離れるのはやっぱりあまり嬉しくない」
黒はぽりぽりと頭を掻きながら言った。もしかすると、柄にもなく照れているのだろうか。

いい歳した人に照れられてもそこまで嬉しくはない。

「何か失礼なこと考えてるな、また」

「いやいやいやいや。そんなことないですよ」

「なら、いいが……」

危うく黒のチョップが飛来する寸前というところで、何とか回避できた。

「じゃあ、これからも『とりあえず』がんばってくれよ」

「はい！」

その後、一時間ほど対策を練ろうとしたが、なにぶん手元の情報が少ないので、また何も進展しないまま時間が過ぎていった。

今日の黒は、きちんと帰ってくれた。

第五話 黒の夜

【少しだけ黒の時間】

芳樹の家から出た私は、自宅への帰路につかず、そのまま仕事を
する場所へ向かった。

仕事をする場所と言っても、「NaN」の事務所ではない。依頼
人に指定された場所だ。

そこは、とある港の倉庫。よく小説などの創作物で闇取引の場所
などに指定されるシチュエーションだが、実際にこういう場所には
特に夜は人が寄りつきにくいので、そういった「悪事」に利用され
る。

港までの移動手段は徒歩または電車。これも依頼人からの指定で
ある。誰も寄りつかないはずの倉庫の近くに車やらが停まっている
と、怪しまれやすいからだとか。とはいえ、車で行くほどの距離で
もないことも確かなので、徒歩で十分間に合うが。

約束の時間は午前二時。そこで行われるのは、「悪事」と言って
も差し支えのないこと。少なくとも絶対に正義や善事とは呼べない
だろう。……一般人からすれば。

人は、大金が絡むとそれを否定する。

悪だという。

それは、人に金欲があることを誰もが知っているからだ。欲にお
ぼれることを人は悪と断ずる。

今からアタシがやろうとしているのは、そういうことだ。

金を受け取り、悪事を働く。大抵の依頼主は私を見て「女か」と
言うが、きちんと仕事をこなせばそれで文句はないらしい。

アタシは金のためなら何でもする。

生きていくためなら何でもする。

それが、アタシに必要なことなら、何でもする。

人が死ぬのは気分が悪い。だが、金をもらうのは気分がいい。決

してきれいごとでは済まない世界が、ここだ。

だからアタシは引き金を引く。

金を得ることで、大切なアタシの日常を守るために。

今日もアタシは、懐から三十八口径五連発リボルバーの拳銃を取り出し、標的に向ける。

……ああ。

アイツだったら、こんな汚い銃を使わなくても、事を済ませられるんだろうな。

指先から火を生み出し。

掌から塩酸を生み出し。

天から雷を呼び起こし。

先ほどやって見せてくれたように念じるだけで、相手を消せるんだろうな。

血など、見る間もなく。

一瞬で、依頼を解決に導いてくれるのだろう。

ああ。

羨ましいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6931y/>

ウィザードライセンス

2011年11月27日17時49分発行